

あけのほし 2015 年 12 月

「クリスマスの光」

菊田行佳

「きよしこの夜、星は光り・・・」

(『讃美歌』 109 番)

「ああベツレヘムよ、小さな町。

静かな夜空に またたく星。

恐れに満ちた 闇のなかに

希望の光は 今日かがやく」

(『讃美歌 21』 267 番)

「天なる神には みさかえあれ、

地に住む人には 安きあれと、

み使いこぞりて ほむる歌は、

静かにふけゆく 夜にひびけり」

(『讃美歌』 114 番)

クリスマスはイエス・キリストの生誕を祝うキリスト教の祝祭を起源としています。ですので、当然イエスが生まれた日は12月25日だと考えるところですが、しかし実際のところイエスが生まれた日も、そして生まれた年さえも正確なところは分かっていません。西暦というのはこのイエスが生まれた年から数えているはずなのですが、そもそも確かな生誕年が分かっていないわけですので、ずいぶんあやふやな基準で世界の暦が成り立っているのだということになります。

イエスの誕生年は、おそらく紀元前6年か7年頃ではないかというのが大方の学者の意見です。どうしてそんなにも誤差が生まれたのかと言いますと、起原6世紀にローマで活躍したディオニシウスという修道士がキリスト紀元の西暦を間違えて数えてしまったということです。その間違いを訂正することなく今日まで来ているわけですが、キリスト教というのはこのように、不確かなことだったり、本質的な間違いでなければ、結構いい加減に取り扱うのだという姿勢が、良く現れていると思います。

12月25日に生まれたのだという方も、やはり同じことが言えます。クリスマスの生誕劇に、よく羊飼いが夜通し野宿しながら羊の番をしているところが演じられています。このことは、パレスチナの地に行って12月に野宿をしようとしたら、それが出来ることではないことがすぐにわかります。現代的な

冬山を登るような装備をしていれば別ですが、当時の貧しい羊飼いたちでは到底できる事ではありません。それではどうして、12月25日に決まったのかと言いますと、北半球では冬至の時が一番夜が長く昼が短いわけで、もともと古代ローマでは12月25日を「勝利の太陽神」の誕生の日として祝われていました。これが後に軍隊の間で流行していたミトラ教と呼ばれる太陽の祭儀と結びついて、12月25日をますます盛大に「太陽の祝日」として祝われるようになりました。それを、キリスト教徒が、本当に闇に光をもたらしたのはイエスだという考えから、12月25日をイエスの誕生日とみなしたのだと言われていています。それがキリスト教がローマ帝国で普及して行くに従って、一般的に定着していったのだということです。

このように、ここでも、「いつ、どこで」イエスが生まれたのかということよりも、イエスという存在が自分たちにとってどういう意味で必要なのかというところが重用になってくるわけです。キリスト教徒にとって、太陽よりも光り輝き、どんなに深い闇が自分を覆い尽くしていようとも、イエスが灯す光が、必ずその闇に一筋の希望を照らしてくれるのだという信仰が、イエスの誕生日を12月25日とさせたのです。

死者たちの眠る深い闇のことを、キリスト教では陰府と言います。そこには一年中夜しかなく、光の届かない絶望が覆っています。死が間近に迫ってきた時、私たち人間はその深い闇の中に降って行くことを心から恐れるでしょう。普段気にも留めなかったそのような闇の存在を、親しい人との死別の時などに、ふと頭をよぎることもあると思います。人間は、そのような自分たちの力ではどうすることも出来ない闇に対して、抗う術を持っていません。富める王や高官たちにも、貧しい羊飼いたちにも、死の闇は平等に訪れます。それはつまり、逃れられない恐れが、すべての人々に等しくあるのだということを現しています。

旧約聖書に出てくる人物の中に、ヨブという人がいます。ヨブは死の病にかかり、もうすぐこの世との別れをしなくてはならないという時を迎えました。親しい友人たちにも彼の孤独は理解してもらえません。そして、信頼していた神にも見捨てられて、自分の祈りに応えてもらえない苦しみの中で、息を引き取ろうとしていました。ヨブの孤独は、ただ死を迎えるという所にあっただけでなく、自分が生きて来た人生の中身の意味を、誰にも理解してもらえなかったことです。家族を愛し、共に働く人々を愛し、ふるさとを愛し、そして神を誠実に愛したこと。このどれもが、自分の身体と共に幻のように消えて行くことに絶えられませんでした。ヨブは最後の言葉として神に向かって叫びます。「どうかわたしが少しでも正しく生きられたのか、そのことだけでも教えてください」と。

そのヨブの叫びに、神は口を開きました。「ヨブよ、あなたは光が住んでいるのはどの方角か知っているのか。暗黒のすみかはどこか知っているというのか（本当に存在していると誰が確認したのか）。光が放たれるのはどの方角なのか、答えてみよ。」そう語りかける神の言には、ヨブの人生の一つ一つに光を当てることの出来る暖かないたわりの思いが込められています。「あなたにはまだ見えていない永遠の光は、実はずっとあなたの体を包み込み、あなたの人生を照らし続けて来たのだ。ヨブよ、あなたともあろう正しい者（小さいことにも誠実なこと）が、よもやわたしのいのちの光を見誤ろうとは。ヨブよ、わたしの僕よ、しっかりしなさい。」そのような励ましの神の言葉、命を与える光です。

キリスト教では、このような神が住む永遠の世界から注がれて来る光のことを、「(聖) 霊なる光」と捉えています。霊ですから見たり、手で遮ったり出来ませんが、唯一その永遠の光をこの世界で反射させて、拡散させることの出来る存在として、イエス・キリストのことを捉えています。神の独り子がこの世に贈られたという喜びの知らせを、世界中の人々と共に祝うのには、こういうわけがあったのです。ヨブも、王さまも、羊飼いかも、そして私たち一人一人に、永遠の光をあらゆる角度から照らすために、御子イエスは这个世界に生まれました。クリスマスに灯される光に、あなたの心が満たされますようお祈りいたします。